

芥川『支那游記』における〈英雄〉・〈豪傑〉

東北師範大学 林 嵐

On the 'Hero' and the 'Bold Hero' in Akutagawa Ryunosuke's *Shina Yuki*

RIN Ran

1921年は中国の民国十年である。1912年の辛亥革命により清帝の退位と民国政権の成立が実現されたが、その直後、孫中山の譲位と袁世凱の執政（1912）になり、さらに袁世凱の帝政建立（1916）、袁の帝制を反対する護国運動（1915～1916）、また袁世凱死後の軍閥分割局面の形成、そのうち張勳の復辟と失敗（1917）、段祺瑞の国会解散（1917）、それを反対する護法運動ならびに段の政権と対峙する中華国民軍政府の成立（1917）、それから南北議和の破談（1919）、その直後の直皖戦争（1919）などなど、また以上と同時期に文化の面では新文化運動や五四運動（1919）も伴われ、多政治勢力による社会の不安定および多岐なる思想並立の中、民国十年即ち1921年の4月7日に国会の非常会議で孫中山が臨時大統領に選出された。

その年は日本の大正十年である。日本の作家芥川龍之介が大阪毎日新聞社の派遣により同年の3月末から7月の中ごろまで中国を旅行していた。1921年4月7日、孫中山が臨時大統領に着任した日には、芥川は中国の上海にいた。感冒の後に乾性肋膜炎を併発したため、上海の里見病院に入院中であった^①。入院している間、一つできた中国政治の大事件に芥川も注目したであろう。4月23日に退院したら^②、さっそく4月24日に清朝の遺臣である鄭孝胥氏を訪問した^③。上海に滞在している間、保皇派鄭孝胥氏のほか、革命家の章炳麟氏、社

会主義者の李人傑氏をもそれぞれ訪れた芥川龍之介は、やはり中国の時勢に相当な関心を持ち、その三人を当時多様な思想の代表として訪ねたのだと理解してもいいであろう。

芥川龍之介の『上海游記』（『大阪毎日新聞』大正10.8～9連載、大正14.11、改造社出版『支那游記』に所収）によれば、「或曇天の午前、村田君や波多君といっしょに」三階建ての鄭氏の宅を訪れた。まず鄭孝胥の子息鄭垂氏と会って話をし、しばらくしてから鄭孝胥氏と面会した。そこで「少時、支那問題を談じ合った」という。芥川は応接室に飾っている「小さな黄龍旗」を、この宅の主人が「中華民國の政治家ぢやない、大清帝国の遺臣である」ことの象徴として特筆する一方、また誰かの「他人退之而不隱者」云々を、旧遺臣でありながらなお社会の政治動向に注目している鄭氏への批評として援引した。またその談話によって理解した鄭氏の時局認識を『上海游記』において以下のようにまとめている。

鄭孝胥氏は政治的には現代の支那に絶望してゐた。支那は共和に執する限り、永久に混乱は免れ得ない。が、王政を行ふとしても、当面の難局を切り抜けるには、英雄の出現を待つばかりである。その英雄も現在では、同時にまた利害の錯綜した国際関係に処さなければならぬ。して見れば英雄の出現を待つのは、奇跡の出現を待つものである。（傍線筆者）

なるほど保守派鄭孝胥氏の観点であろう。当時の中国というと、中国における權益を奪いながら、さらなる利益を狙っている西洋の各国列強および日本帝国主義が、中国の軍閥分割局面を利用し各自の打算によって、それぞれの軍事勢力や政治勢力を支援しているのは、明白な事実である。こういう時勢の中で、かつて日記に「日本惟速中国復辟」（1919年2月6日）と書いた鄭孝胥はよく国際時勢の動向を洞察し、実力関係や政治利益を審度した上に、以上のような考えを持ったのであろう。

鄭孝胥は芥川訪問の二年後に溥儀の小朝廷の内務府大臣になり、十年後に偽満州国の総理大臣になった人物である。当時の鄭氏が言った「奇跡」の「英雄」を待つというのは、すなわち外国の「英雄」に期待をしていると解釈され

る。その「英雄」への期待に潜んでいるのは、外国の勢力、強いて言えば「惟速中国復辟」と言う日本の勢力を借りて、清王朝の復辟を実現しようとする企図ではないか。その企図が以後の鄭孝胥氏の一連の行動と対照してみると、現在でははっきり読み取れる。当時ではこういう鄭孝胥氏の「英雄」期待の内実を、芥川龍之介は当然読み取ったろう。

中華書局出版の『鄭孝胥日記』を見れば、4月24日の条には数件の記入がある。しかし、芥川の訪問については、ただ文末に淡々と「波多及日人芥川龍之介来訪」の一言だけが記してある。頻繁に日本人の来訪者と面会した^④鄭孝胥だから芥川との談話は特別に考えて用意した発言ではなく、普段でもよく来訪者に公開する本音の内容ではないかと推測される。実際芥川は二回も鄭氏宅の訪問を重ねたが二回目の訪問は、一回目の訪問より三週間後の5月16日である。三週間で杭州・蘇州・鎮江・揚州・南京を廻ってきて上海に戻った当日、芥川はまたその夜、船に乗って漢口へ向かうので、短い時間で鄭孝胥氏を「支那近代の詩宗」として伺った^⑤。鄭孝胥氏は芥川龍之介のために詩を書いてくれた^⑥。芥川は帰国後それを軸にしてもらった。そのほか芥川蔵書に『海蔵樓詩』（鄭孝胥著 丙辰印）^⑦があるのも、二回目訪問の際著者から贈与されたものであろう。

芥川は中国旅行から帰国したらその旅行の見聞や感想を綴った『上海游記』（『大阪毎日新聞』大正10.8～9連載）、『江南游記』（『大阪毎日新聞』大正11.1～2連載）、『長江游記』（『女性』大正13.9）、『北京日記抄』（大正14.6）を次々と発表し、またそれらに『雜信一束』を加えて『支那游記』（大正14.11改造社）としてまとめて刊行した。鄭孝胥氏の「英雄」論に応えようという意識があったのであろうか、芥川は『支那游記』全般においてはあまり「英雄」という言葉を使うことはなく、むしろ旅行中に会った中国人を「豪傑」という言葉を持って形容した。たとえば『上海游記』の「八城内（下）」上海の城隍廟見学の一節では「金瓶梅の陳敬濟、品花宝鑑の谿十一、——これだけ人の多い中には、さう云ふ豪傑もゐさうである。しかし、杜甫だとか、岳飛だとか、王陽明だとか、諸葛亮だとかは、薬にしたくもゐさうぢやない。言い換えれば現

代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、残酷な、食い地の張った、小説にあるやうな支那である。」(傍線筆者)と作者の感慨を述べた。始めて現地で中国人庶民の日常を管見し、それはまたそれまで漢文の書物によって受け取った詩文の世界と雲泥の差があることに、芥川がいかにか慨嘆しても当然のことであろう。

ところで、芥川が例にした『金瓶梅』と『品花宝鑑』はいずれも中国の明清小説である。またいずれも男女の情事や男色のことについての描写が有名である。こういう小説中の男人物を「豪傑」という言葉でイメージするなら、ここでは多分一般庶民の、あるいは俗人間の「好男児」の比喩として使われているのであろう。この意味での「豪傑」という言葉は、なんと言っても前記の鄭氏が言う「英雄」の一語とはまだ明らかに対比にはならない。書簡に「野叟曝言と云ふ荒唐無稽な支那の小説を半分ばかりよみましたこれは永久に半分から先をよみ續ける勇氣はなささうです」(小島政二宛、大正8.2.23)と書いた芥川は『野叟曝言』と大体同類である『品花宝鑑』の人物を「豪傑」で例えたのは褒貶の意のいずれであろう。

しかし、『上海游記』の次に完成した『江南游記』においては、芥川は別の意味で「豪傑」という言葉を繰り返した。たとえば「九 西湖(四)」では西湖水辺の風景に『水滸伝』の人物をあてて阮小二・阮小五・阮小七と想像を馳せながら歩み寄ってきた駄菓子売りを「天罡地煞の百八人の中にも、キヤラメルを売る豪傑は一人もゐない。」とか、また「十四 蘇州城内(中)」では「両肌脱ぎの男が二人、両刀と槍との試合をしてゐた」のを見て「何でも病大虫薛永とか、打虎將軍李忠とか云ふ豪傑は、こんな連中だつたのに相違ない。私は堂の石段の上に、彼等の立ち廻りを眺めながら、大いに水滸伝らしい心もちになつた。」とか、明確に「豪傑」のイメージを『水滸伝』と繋げるようにした。言うまでもなく、同じ明清小説でも、『水滸伝』の豪傑たちは『金瓶梅』や『品花宝鑑』たぐいの男たちとまるで質が違ふに決まっている。ここまで見ると、もう芥川の「豪傑」観は世俗の「好男児」から社会という舞台で大活躍する「好漢」へと変化したことが分かる。

さらに芥川は『水滸伝』の豪傑たちの集団性並びにその集団の意義について次の一段を持って長く論じた。

「水滸伝らしい」とは何かと云へば、或支那思想の閃きである。天罡地煞一百八人の豪傑は、馬琴などの考へてゐたやうに、忠臣義士の一団ぢやない。寧数の上から言へば無頼漢の結社である。しかし、彼等を糾合した力は、悪を愛する心ぢやない。確武松の言葉だったと思ふが豪傑の士を愛するものは、放火殺人だと云ふのがある。が、これは厳密に云へば、放火殺人を愛すべくんば豪傑たるべしと云ふのである。いや、もう一層丁寧に云へば既に豪傑の士たる以上、区々たる放火殺人の如きは、問題にならぬと云ふのである。善悪を脚下に蹂躪すべき、豪傑の意識が流れてゐる。(中略) 天下は一人の天下にあらずと云ふが、さう云ふ事を云ふ連中は、唯昏君一人の天下にあらずと云ふのに過ぎない。実は皆肚の中では、昏君一人の天下の代わりに彼等即ち豪傑一人の天下にしようと思ふのである。(傍線筆者)

まさに列強軍閥らの内実を道破するほどの高論である。「区々たる放火殺人の如きは、問題にならぬ」とする集団なら天下を狙っているのもあるが、しかし「豪傑一人の天下にしよう」と腹の中で考えるような豪傑はけっきょく近代の中国を救うことができるかどうか。芥川は鋭い観察の眼と冷静な思考を、作家の筆によって發揮した。

芥川は中国の将来について考えていた。また鋭い観察の眼を持って中国旅行中にいろいろと見てきた。彼の所見は樂觀的にはならない。「丁度日の暮の停車場に日本人が四五十人歩いてゐるのを見た時、僕はもう少しで黄禍論に賛成してしまふ所だつた。」(『雑信一束』「十九 奉天」)と書いた芥川は奉天でどんな日本人を見たろう。四五十人といったら当時ではやはり軍人としか考えられない。実際天津—奉天—丹東—朝鮮半島を經由で日本に戻った芥川は、奉天以後の旅行について一語も触れることはなかった。それは旅行中に何も出会わなかったのではなく、きっと何かと出会ったろう。その何かは或る意味でたぶん奉天での所見と同じようなことであろう。それもまた芥川をもっと深く思考

させたかもしれない。

芥川は『支那遊記』を一冊としてまとめて刊行するまでのあいだ、『侏儒の言葉』をほぼ二年間にわたって『文芸春秋』に連載していた⁸⁾。すくなくとも、その中の「倭寇」と「蝸牛」の二段は芥川の鋭敏な観察と深遂な思考の結果であると言いたい。まず以下に引用しておく。

倭 寇

倭寇は我我日本人も優に列強に伍するに足りる能力のあることを示したものである。我我は盜賊、殺戮、姦淫に於いても、決して「黄金の島」を探しに来た西班牙人、葡萄牙人、和蘭人、英吉利人等に劣らなかつた。

支 那

蛍の幼虫は蝸牛を食ふ時に全然蝸牛殺してはしまはぬ。いつも新しい肉を食ふ為に蝸牛を麻痺させてしまふだけである。我日本帝国を始め、列強の支那に対する態度は畢竟この蝸牛に対する蛍の態度と選ぶ所はない。

ずばりとした指摘である。このような冷静かつ率直な日本帝国批判は恰も鄭孝胥氏の「英雄」期待に答えられるものであろう。

さらに芥川は以上のような帝国主義批判の精神を持って小説『桃太郎』（『サンデー毎日』大正13.1）を書き出した。日本の民話桃太郎の話から素材を取りながら、鬼が島を平和の楽土として描き、そこを征伐した桃太郎を侵略者として描いた。——「鬼は熱帶的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊つたり、古代の詩人の詩を歌つたり、頗る安穩に暮らしてゐた。」しかし、「桃太郎はかういふ罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを與へた。」が、その後鬼たちの復讐が繰りかえされる。小説『桃太郎』の創作のきっかけは章太炎先生の桃太郎論であろう⁹⁾。芥川は『僻見』（『女性改造』大正13.4~9）の「岩見重太郎」一節につきのように書いている。

僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剥製の鰐をぶら下げた書齋に先生と日支の關係を論じた。その時先生の云った言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。——「予の最も嫌惡する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得

ない。」先生はまことに賢人である。僕は度たび外国人の山縣公爵を嘲笑し、葛飾北斎を賞揚し、澁澤子爵を罵倒するのを聞いた。しかしまだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生まれた桃太郎へ一矢を加へるを聞いたことはない。のみならずこの先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる。

もともと『上海游記』において芥川は章太炎先生の桃太郎論を言及しなかった。主に章太炎先生の「時務を知るものは俊傑なり」の言い方に賛同できないようであった。その時に聞いたはずの桃太郎論を、芥川はその後の中国での見聞を重ねる事によって、よりよく理解したのであろう。

芥川は上海のほか、また北京で中国の文化人を訪問した。胡適の日記には芥川との面会や談話などの記録がある。白話詩について胡適先生の意見を聞いたのである。芥川はまた『白話詩研究集』の作家謝楚楨氏とも対面した。謝楚楨氏が自作の『白話詩研究集』を芥川龍之介に進呈し、その扉頁の裏一面に短文を書き入れた^⑧。その中の一段を引用しておく。

作幾篇攻撃の大文字, 遍登日本有関的報章, 給少数侵略家的「当頭喝棒」,
喚起日本人民都同聲反对; 便是我同芥川訂交的. 一点期望心! 也是芥川君對於
「唇齒相依」の隣邦, 不容卸的責任!

謝楚楨氏の「少数侵略家」批判及び上記のような熱い期待を、芥川龍之介は無視したり忘れていたりしたことがないであろう。小説『桃太郎』の創作にはこういう文化人の思想影響もあると思われる。「庶幾芥川君此番遊歴我中華, 在徒看些山川風景, 或僅僅帶点点文学知識帰国罷了! 芥川君以為何如?」という謝氏の疑問に芥川は『支那游記』や『侏儒の言葉』や『僻見』や『桃太郎』などの創作を持って完璧に答えたと言えよう。

注釈:

- ①宮坂 覚編『芥川龍之介全集総索引 付年譜』（岩波書店 1994）の年譜による。
 - ②同上
 - ③中国歴史博物館編、勞祖徳整理『鄭孝胥日記』（中華書局出版、1993）
民国十年三月十七日（1921年4月24日）の記録による。
 - ④同上『鄭孝胥日記』を参照
 - ⑤関口安義『特派員芥川龍之介』（毎日新聞社、1997）によれば、芥川龍之介の鄭孝胥訪問は「二度目は一人で孝胥の息子鄭垂が通訳に当たった」（105頁）という。ところが、『鄭孝胥日記』（中華書局出版、1993）の民国十年五月初九日（1921年5月16日）の条では「芥川、波多、村田来」と明確に記入している。鄭孝胥氏はほぼ毎日のように当日の出来事を日記に記入するので、このことについてはやはり『鄭孝胥日記』の記載が信用されるであろう。
 - ⑥『上海游記』によると「夢奠何如史事強。呉興題識遜元章。延平劍合誇神異。合浦珠還好秘藏」という詩文である。
 - ⑦日本近代文学館所蔵
 - ⑧大正12.1~14.11
 - ⑨林嵐「近代中国文化人对一个日本作家的影响——評芥川龍之介的小説『桃太郎』」（『東北師大学報』176期、1998.11）を参照
 - ⑩日本近代文学館所蔵芥川蔵書『白話詩研究集』（謝楚楨著、民国10）を参照 謝楚楨氏書きいれの文末に「一九二一・六・二五・北京 謝楚楨」という日付けと署名がある。
- * 芥川蔵書の閲覧につき日本近代文学館に感謝の微意を表します。

(りん らん 中国東北師範大学教授)